

P28

齲蝕に罹患した胎児性アルコール症候群の1例

○西原恵美、柳田憲一、山座治義*、増田啓次、
西垣奏一郎*、野中和明*
(九大病院・小児歯、九大・院・小児口腔医学*)

【緒言】

胎児性アルコール症候群（FAS：Fetal Alcohol syndrome）は、妊娠中の母体が多量にアルコールを摂取することに起因した胎児性異常といわれる。主症状として①出生前および出生後成長障害、②中枢神経系障害、③顔面正中中部形成不全による特異顔貌の3主徴が挙げられる。近医からの紹介で、齲蝕治療を主訴に来院した2歳6か月の女兒（FAS罹患）に遭遇し、歯科的対応を通じて若干の知見を得たので報告する。

【症例】

患児：初診時年齢 2歳6か月 女兒

主訴：上顎前歯の齲蝕

現病歴：2歳2か月頃、乳児院職員が上顎前歯の白濁に気づき近医を受診。上顎両側乳中切歯にサホライド塗布を受け、以後も定期的経過観察を受けてきた。全身的既往管理の必要上、当院小児科にも定期的に通院していた。同近医より、当院小児科との連携による齲蝕治療を希望の上、当科での歯科的加療と口腔内管理依頼に到った。

既往歴：胎児性アルコール症候群

超低出生体重児（在胎34週3日 出生時842g）

精神発達遅滞

家族歴：母 アルコール依存症

第1子（7歳）Smith-Magenis症候群

第2子（3歳）超低出生体重児

リウマチ性多発筋痛症

第1、2子ともに当院小児科通院中

第3子である本児は乳児院に措置入所中

全身所見：身長69.3cm 体重6.335kg

Kaup指数13（やせ型）

口腔内所見：上顎乳中切歯口蓋側実質欠損部にサホライド塗布を認める。上下顎第一乳臼歯咬合面に白濁を認める。

Hellman歯齢 I C。上下顎第二乳臼歯は未萌出である。

エックス線所見：上顎乳中切歯象牙質に透過像を認める。

診断：上顎乳中切歯の象牙質齲蝕
上下顎第一乳臼歯の初期齲蝕

【処置および経過】

- ・ 2歳6か月（初診）：上顎前歯エックス線撮影
- ・ 2歳7か月：セメントにて下顎第一乳臼歯咬合面小窩裂溝の予防填塞
後頭一前頭位撮影
- ・ 2歳8か月：セメントにて上顎第一乳臼歯咬合面小窩裂溝の予防填塞、歯口清掃指導

【考察】

齲蝕の原因としては、砂糖含有飲料の日常的摂取が疑われた。外来での長時間の処置は容易でなく、小児科主治医より患児の全身状態を鑑み、全身麻酔下、鎮静下での処置も困難とのことである。従って今後は新生齲蝕発生の抑止、齲蝕進行の防止に主眼を起しながらの口腔内管理を行っていくことが必要とされている。胎児性アルコール症候群では、歯の発達遅延もみられるとされている。更に患児の今後の育児環境の推移により、口腔内衛生環境の変化が予想される。従って、乳歯列完成から永久歯萌出完了まで長期間にわたっての口腔内管理が必要とされている。

【文献】

- 1) Rie Imai, Yasuo miake, Takaaki Yanagisawa and Masashi Yakushiji : Growth and Formation of the Tooth Germ in a Model of Fetal Alcole Syndrome. Journal of Hard Tissue Biology 61-70.2007.
- 2) Shinya Oda, Takashi Sawada, Takaaki Yanagisawa, and Masashi Yakushiji : Morphometric and immunohistochemical investigation of tooth development in rats prenatally exposed to ethanol. Pediatric Dental Journal 1-8, 2009.